

CRIMSON COLOR COMICS



J-GIRL FIGHT



「くそっ…誰よアンタ！」
「忘れたかな？」
「まあ覚えてないか…。」
「三年も前のことだしな。」
「お前は私の船から
1000万ペリーもの
大金を盗んでいったんだ。」
「さあ知らないわね。」
「アンタみたいなマヌケな奴
山ほどいたから
いちいち覚えてないわ」



「いいねえ。その威勢のよさ。」
「あっ……」
徐々に快感が強くなっていく。
「あの時は色仕掛けでせまられて
あと少しでお前と
やれるという状況で
お前にたまされ
尻にはまってしまった。
あのときの悔しさときたらもう……」
「だ……たまされるほうが
悪いのよ！」



「まだそんなこという
余裕があるんだな」

「あうっ！」

（くっ……おかしい……）

こんなヘタクソな責めで

気持ちよくなるなんて……！

「ほらほら声も体もが

震えて来たぞ。」

おまけにコッは……」

「ああちー！」

「ほらこんなグチュグチュだ。」

「卑怯者……」

どうせクスリでも

使ったんでしょ！」

「フフフ……」

お前に卑怯者扱い

されたくないな」



かつて手玉にとった
嬌小な男に
もてあそばれることが
機しくてたまらないナミ。
「くそっ……や……めっ……あああっ！」
「そうそう
そういう声が聞きたかったんだ。
三年間たまりにたまった
うっぶんをお前の体で
はらさせてもらおうじゃないか。」
「ああっ……くっ……」



完全に身動きができないように縛られて
丹念に媚薬を塗りこまれていく。
「小賢しいお前でももう今度は何もできない」
男のたまりにたまっていた欲望は
そう簡単にはおさまるものではなかった。
いたぶり続けて2時間以上経つが
いっこうにおさまる気配もなく
それどころが
徐々にガマンできずに色っぽい声をもらすナミに
ますます興奮し、
さらにねちっこく責めを重ねていく。



ナミの体は信じられないほど熱くなっていった。
「くっ…おねがい…許して…」
盗んだお金だったら返すから…」
「ダメだな。いまさらもう遅い」
あのと時ワシが受けた屈辱は
金を返したくらいではおさまりきらん。
お前はもう一生ワシの肉奴隷に決定だ」
「そ…そんなー」



「肉奴隷としてまず
一発目を受けとれい！」
「ああああああああああっ！」
「この三年間
もしお前を捕まえたら
どういたぶってやろうかと
100通りくらい
考えていたからな。
毎日毎日いたぶってやるぞ。
たのしみにしていろ」
「あああああああ
ああああああああっ！」



低い振動音が聞こえてきた。それと同時に、胸の先にその振動を感じるリンス。

リンス「な、何……これ？ えー？」

男「お目覚めかね、リンスレッドロウカー」

リンス「誰ー？ 何よこれー？ どういうことー？」

男「見ての通りだが、説明して欲しいかね？」

リンス「……これ以上おかしいことをしたら、折えてやるからー」

男「キミが警察に行けるわけがないだろう……ああ、あったあった」

男は、冷静な顔つきのまま更に道具を取り出す。

それは、男性器を模したパイプレーターだった。

リンス「ひっ……やめてよ！ 何するの！？」

男「もちろん、キミの愛らしい膣に挿入する以外の使い道はないね」

リンス「やだっ！ ちょっと……んあっ、やめてえっ！」

男はリンスの股を押し開き、陰部にパイプをあてがう。

ヴァキナはまだ異物を受け入れる準備ができていなかったが、

男に手抜きはない。パイプにはたつぷりとローションが塗られていた。

男「さあ、咥え込んでくれたまえ」

リンス「痛っ！ はっ、入るワケないでしょー？ やっ、やめ……」

ンああああああー！」

膣をこじ開けて入ってくるパイプに感触に、リンスは快楽よりも

痛みと恐怖を覚えた。

ほぐれていない膣道は、ただ圧迫感だけを伝えてくる。

リンス「つかは、はあ、はあ……んぐー、ぬ、抜いて、抜いてよ……んぐうー」

男「なに。すぐに気持ちよくなる……ほら」

男がパイプのスイッチを入れた。乳首を襲う振動よりも激しい振動とうねりが、

膣内狭しと暴れ出す。

陰核部分にも刺激を与えられるよう設計されたそれは、痛みと同時に

快楽も与えるようにできていた。

リンス「あがつ、んああああー！ ひぐー！ 痛い、つくうううっ！」

男「ああ、痛みに至る顔も美しいね……ずっと、その顔を見たいと思ってたよ」





リンス「ああ、な、なんなのよ……
あんた、いったいなんなの……」

男「キミのファンさ。ずっとずっと」

「欲しいと思っていたんだよ……キミのすべてをね」

リンス「ふざけたことを……うっうー」

あんたをよかにやれる物は、ひとつもなっ
んあ、はあ……ないわー」

男「その気大などころも未だだ……」

さあ、腹だけではなく、尻の方にもあげよ……」

リンス「なっうー？ やめろ、やめてよっうー」

リンスの懇願に耳を貸さず、

数珠繋ぎになっているボールを肛門に押し込んで、

リンス「あが……うっ、あ、入る、お尻の中、

いっぱい……ああ、入ってくる……うー」

男「美しい女性には肛門までもが美しい」

私の目に狂いがなくて嬉し……」

リンス「やめて。も、もう入れないで……」

苦しい、うっ。んん、んうああああ……」

直腸にボールを押し込められる。

それは振動を伴わないが、

膣内で煮ているパイプが粘膜の

皮一枚隔てた先からボールを揺すった

リンス「抜いて、こ、これ、抜いて……」

「こんなの、おかしくなる……」

私、駄目になっちゃうっー」

男「いやいや、キミなら大丈夫さ……」



男「これから両腕があつてね。少し席を外すがな。寂しくないように、私のペットを置いていくから安心してくれたまえ」

リンス「マアトロー？ なによそれ、その前にこれ外していきなさいよ」

男「それはできない相談だ……」

そのかわり、目隠しをしていてあげよう。リンス「意味が分からないわー？」

半狂乱の悲鳴をあげるリンスに、

男「それは、存分に楽しんでいくれたまえ」

リンス「いやー、怖い、何ー？」

なんなのよおっちゃん！

フッフフハハ

リンス「ひいっ！ な、何？ 何がいるの？」

荒い鼻息が聞こえてきた。

そして、ベッドに墜ってくる。

目隠しをされたままのリンスは、

それは大聖の雄犬二匹であった。

リンス「こら、来ないで！ 来るな！」

あつ……きやあつ……」

犬「ハッハッハッ」

犬たちは慣れているのか、

リンスの叫びにもたじろぐことなく迷寄る。

その素肌を舐め始めた。

リンス「きやあああつ……」 何ー？

やだ、犬！？ 呸っ！ やめてよ！

素らかく首、うな臍腹を、

肉の詰まっけいそうな太ももを、

乳房を、足先を舐め回す犬たち。

リンス「いやー、こんなのイヤあああああ！」

目隠しをされたことで、犬たちの行為を

肌で感じるリンス。ぐらついた舌に

身体中を愛撫されて身をよじるが、

犬たちは舐めるのをやめようとしな

リンス「ああああ、あ、あ……」

いや、嫌か、助けて……」



碎峰「な、なんなんだ貴様たちは、救せり」
女「なんなんだ、はないでしょ？」

せ、せっかく可愛がってあげようと思ってるのに、
碎峰「何が可愛がるだー」

私を誰だと思っているー」
女「だから、碎峰でしよう？」

私たちと同じ、レスビアンなのよ」
碎峰「な？ ああ、

ど、どこを焦って……シブッ」
両手の絞束であるのをいいことに、

女たちは碎峰の肌の手を、はしてきこ
服の隙間から手を入れ、

初手から容赦なく臀部を責める」
碎峰「こ、この痴れ者どもがー」

誰がレスだ、誰がっ」
女「あら、だってあなた、

先代様に悪態ついてたんでしょ？」
女「ええ、有名よ。あなたが夜一様に

付き従っていたのは、夜のお供も
していたからだって」

碎峰「私には、いや、夜一様にも、
そのような趣味はないミラー」

女「またまた、そんなこと言ってる、
コブは正直よ？」

碎峰「んっくー！ 上ッ！
そんなことを触る、

んんっ、くふ、んくッッ」
一人はあまり肉厚のない愛らしい乳房を、

その先端の乳首をくすぐり、摘み上げる。
一人は股間へと手を伸ばし、

下着の上から女性器を撫で回す。
もう一人も同じく股間へ手を這わせ、

にやにやと舌なめずりをしていた。
女「とにかく、せっかくのものを、
一緒に楽しみましょうよ」



女「さあ、そろそろ脱ぎ脱ぎしましなうねー」
碎峰「や、やめる……」

私にその趣味はないと……

女「はい、ご開帳く〜」

女「あははー 可愛いおっぱい」

碎峰「んくっ！ よっ、よせ。そこは……あああッ」

女「あら、もう隠れてるんじゃない？」

女「私たちの手で感じてくれたのね。嬉しいわ」

碎峰「くそ、くそ……んんううー ああ、やめっ」

触るな……っ！

女の指が、碎峰の一番敏感な部分に触れた。下着の隙間から……

ねっとりとした感覚を与えながら陰核をくすぐ

碎峰「ひゃー あ、っく。そ、そこは、貴様たちのような者が触れて……場所では……

ああん、く、ふっ。ンン！

女「私たち以外の誰が触れるのよ」

どうせ男に興味ないんでしょ？」

碎峰「馬鹿なことを……んん、く。やめっ」

女が陰核の包をくり上げる。

刺き出し……また粘膜の小粒が下着に濡れ、

碎峰の淫歌に衝撃を走らせた。

女「ふふ。集み出てきた集み出てきたッ」

碎峰「ああ……だ、駄目だ。そんな……っく」

女「お尻も張りがあって真ましい。それにほら

……前門も、キラとして可愛いわ」

碎峰「ああああッ」

女の指が、肛門に触れた。そして、

突っ込まんば……押し当ててくる。

碎峰「やめるッ！ そんなところまで……っく」

っくー ああ、お、おはッ！

女「あら、お尻が性感帯？ 可愛いいうッ」

碎峰「違っ、く……ンン。ひあッ！ お、胸を、

抓る、な……ん、あッ」

乳房を弄っていた女、股間を愛撫する二人に、

負けないようにと刺激的なためを繰り返す。

全体を荒々しく揉みほぐし、尖端を摘み、転がす。

碎峰「つくはあ、はあ、はあ……ああ。も、もう……」

女「ああ、「こんなさい。いつまでもくすぐるばかりじゃいけないわよね」

女「はあい。それじゃ、脱ぎ脱ぎしましょ」

碎峰「ああ……駄目。え、見るな……やめろ……ああ」

下着がはがされる。同時に、秘部に溜まっていた愛液が滝のように流れ出した。

女「ふふふ、妻い量……いい匂い。素敵なお愛液だね」

女「こんなになつぷりで。ほら、おまんこエルエル」

碎峰「ああー やっ、ひゃー 触るな、指を、ああ、指を入れるな……ああああ」

碎峰の尻を高く上げさせ、女性器を視察する女。

しかしすぐに足と膝の間では物足りなくなり、指を這わせ、舌を伸ばす。

碎峰「あぐ、ぐう……んううー」「こんな屈辱的な格好……許さぬ、許さぬぞ」

女「あら、まだ強がれるのね。さすがは二番隊長様だね」

女「でも、嫌がる子を無理矢理イかせると、楽しいわよね……べろっ」

碎峰「やめる。口づけな……んじゅっ、ふふ。んん、ちゅっ、ふふ、んうう」

直ねられた口から唾液を流し、舐められる碎峰。その息苦しさは眩暈を起したかと思うと、陰部からの刺激で意識する。

女「見て、このおまんこ。ヒダヒダも少なく、とっても綺麗」

女「お尻だって、キツとすばまって可愛いわよ。ほら、指一本でもキツキツ」

碎峰「んぐっ！ じゅぶう、ちゅ、んううううっ！」

直に、直腸に、指が挿入された。押し込まれた指が内部で強く感覚に、碎峰は憎悪と快感を交ぜにする。

碎峰「許さん許さん許さん許さん……ああああああ……」

陰毛を摘まれ、全身に官能の電撃が走り回る。

陰毛を引つ張られ、こそばゆさに身をくねらせる。

舌を吸われ、唾液を吸われ。乳首を舐られ、乳房を揉まれる。

碎峰はそれでも屈しまいと抵抗する。しかし心とは裏腹に、身体はすでに快楽の虜となっていた。











乱菊「……くっ！ 救せ！」

救しなさいと言っているのよ！」

男「いやなこった。せつかく憧れの乱菊さんを捕まえられんだからな」

男「そうそう。その巨乳。たまらねえよ」

後ろ手に縛り上げた乱菊を羽交い締めにする。その手は、早くも乱菊の乳房を揉みしだいていた。

男の攻めは、最初から雄雄であった。

愛撫などという優しいものではなく、ただひたすら己の欲望を満たすだけの行為。

その豊満すぎる乳房を揉みほぐすのではなく、鷲づかみにする。乳首を振り、

摘み上げてその感触を楽しむだけ。

乱菊「痛い……んっ、救しなさい！ っく、うんん」

男「くはー。デカくて柔らかくて最高だな」

乱菊「やめると言ってるのよ！ っく、摘むな」

……んっく、あうー」

男「デカいくせに敏感か……」

ますますたまらねえぜ」

男「お、俺にも揉ませろよ」

前に立った男たちは、乱菊を囲より、乳房を見つめながら喘いでいた。

その眼、……かいが、乱菊に嫌悪感を走らせる

男「くくく……震えてるのかよ？

可愛いと……あるじゃねえか」

乱菊「くっ、も、もういい……」

きやつ、あああー」

男「へへ、声もたまらねえぜ、乱菊ちゃん」

乱菊「んんっ……くっ」

乳首ばかりを責め立てるその行為に、

乱菊はマゾヒスティックな快楽を覚え始めていた。

乱菊（違う……あたしは、こんなコトで……）



わざと乱暴に衣服をはぎ取る男が、
きわめな胸の張りのある腰が、
その前にさらけ出された。

男「ヒューー 見ろよ」

。護廷十番隊副隊長の赤っ裸だぜー」
乱菊「あー、それが分かっていて
こんなゴトをしてるの!？」

あたしが本気で怒らないうちに……」

男「無駄無駄。斬魄刀もない。鬼道も

使えない状態のあんたにゃ、何もできやしねえよ」

男「俺たちに犯されること以外にはな〜くははっ」

乱菊「くっ……」

手を縛られているだけではない。

身体が自由に動かせないのは、何か薬でも塗られたか、

それとも縛道か。

乱菊はまだ自由の利く目に、怒りと憎悪を乗せる。

しかし、男たちはその視線にさえも欲情していた。

男「おお、怖い怖い……でもよ、

いくら怖い顔したところで、

赤っ裸じゃ余計にツッパるだけだつてーの」

男「でもよ、

すぐにそんな目すらできないようにしてやるぜ」

乱菊「なっー はっ、放しなさい」

両脇から取り押さえられ、持ち上げられる乱菊。

運ばれた先にあったのは、三角木馬であった。



乱菊：「あっー いやっー」

「あああああああー」

吊し上げ、木馬をまたがせる。

鼻れる脚を押さえること。

赤子の手をひねるようなものだった。

男：「おほーっ。割れ目にびったり

と食い込んでるぜ」

男：「りゃあ、

たまらねえ見せ物だな。くほほっ」

乱菊：「このあたしにこんな……」

く、今すぐ下ろしなさい」

男：「あんたのその……強さね、

いつまでもつか楽しみだぜ」

乱菊：「フン。……二度の責めで、

あ……が屈服するとても

思ってるの？」

男：「くくく……それじゃあ、

これでどうだい？」

乱菊：「え？」



男がスイッチを入れると、木馬が振動し始めた。低い振動音が狭い部屋の壁に響き渡る。

乱菊「へっ、何よこれ！ こんな……んっ、すごいし、痺れる……」

男「お楽しみはこれからだぜ」

乱菊「あああ……だ、駄目。食い込……ん、くっ……くは、はあ、はあ」

動けば動くほど、自らの重みで木馬が食い込んでくる。

ヴァギナを割り、クリトリスに達した直後、

乱菊の官能を激しく震わせた。

乱菊「きやっ、ああ！ だ、駄目、いや、これっ……あああああ……」

男「丸に入ってもらえたようだな」

乱菊「くっ……馬鹿な、こと……言わないでっ！ あ、あ……くっ……」

もともと敏感な部分を襲う振動が波を打った。同時に、乱菊の腰があまりの官能に跳ね上がる。

男「振動の強さも変えられるんだ。なかなかオツなもん……」

乱菊「あふ、んっ、くっ……う、こ、この程度で……んっ、男「さすがに粘るねえ……それじゃあ、俺たちが手伝ってやるよ」

乱菊「え？ な、なにを……やめっ！ 男「へへ。乱菊さんの素肌あ」

乱菊「やめろ。触るなっ……くはっ、あああ……身動きの取れない乱菊に男たちがまとわりついた。

たわわな乳房を、そそり立った乳首を。三角木馬に割られている股間や尻を。

男たちは舌なめずりしながら機で回す。



乱菊「あつし、くまんうし」

いつ、言うわ。言うから、

振動、強く、しないで……」

あ、来ちゃう、来ちゃうううう」

男「早く聞かせてくれ」

そのキレイなお口でよお」

乱菊「あ、あたし……」

あたしの……っ」

男「なんだよ」

乱菊「あたしのマ●コに、

そのぶつといち●ポ

ぶち込んでえっ——」

男「くははっ」





「セフィアアリアー...のせ...最も強く
気高く、そして美しい...
「どうでもしないとあなたと...入ませぬからね...」
「だ...誰ですかーあなた達はー？」
「さあ、みなさん。パーティーの始まりです。」



「いやぁ…今日のローションは特別ですな」

「く…あ…何を…」

低頭をつけた男たちが

ローションらしきものを塗りたくって

「や…やめな…さいー」

「さすがはセフィリアさま…」

こんな状況でそんな命令口調な女は
はじめてですぞ」

ただのローションではない、

強烈な催淫効果のあるローションだった。

はじめは冷静にこの状況を打開する策を

模索していたセフィリアだったが

ズンツと頻に響く快楽が思考を

遮断しはじめた。

「こ…これは…何…ああ…」

「足がピンとのびてますな…」

感じて…ものがまるわわ…ですぞ」

「そ…そんなう」

か…焼けてなど…う…ア…」

「足のつま先まで反り返らせて…」

女が感じてる反応は…まかせませんな」

「ち…ちがいます…っ…んっ」



「どれ……ここは念入りに塗っておきます」

「……やめ……あああッ」

怪しく光る乳房を優しくつかみながら、
乳首の先端へとローションを塗り上げていく。
「いたいこれは……雄の……しわざ……」

「ああッ……ああッ」

「余計な心配はしないでいいんです、
セフィリアさま」

「我々はただあなたの体で遊びたい……」

「ただそれだけなんですからね……ククッ」

「ん……くっ……何を……」

「……ら立って……立って……」

「ひゃううッ」



「さで…そろそろココにも…」
「あああっ！」
ローションを粘膜に塗られると
性感帯をむき出しにされたかのよう
感覚がずきずきになっていった。
「ほほお…ヒクヒクしはじめさ」
「あのセフィリアさまがイク瞬間…
見てみたいですねえ」
「んっ…くっ…そ…そんなこと…
私は決して…」
「ここまでやった」
もうチョイチョイと触れたにけぞる。
「なっ…や…やめっ…ああっ…く…うきうきッ」
「ダメッ…まさか…そんなっ……」
「あああああああああ…あああ！」



「いつも凍としたセフレです……」

女としての本性を見れて最高です……」

「はぁ……はぁ……はぁ……」

今度は拘束室の上半分がせり上がり、イスのような状態になった。

「くっ……」こんなこと……

いつまで続けるつもりですが……」

「ククク……いつまで……続けまっすよ……」

こまでするのに随分お金がかかりましたからね……」



すでに快感で震えている体に
さらなる快感を
ひきずりだすための
バイブレーションが
襲ってくる。

「うあああああああ
……ちよっ……持って……」

あああああああ

（ダメ……強すぎる……）

これは……耐えられない……小
快感を与えるためだけに

つくられた玩具が

どうしようもないほど

淫靡をセフィアの体に

打ち込んでくる。

「やっ……やめっ……あああああ」

も……もう……ダメ……あ

あああああああ

（な……なぜ……）

（こんなことに……？）

「それじゃあ入れますよ？」

いい……セフィアさま？」

「くっ……だ……ダメ……です……」

んんっ……やめな……さい……」

もう何も手を触れていなくても

その声をもらしてしまうほど

体には快感が充満し、

頭が真っ白になっていた。

ズブッ……」

「あああああああああ」



「こんな状態でも

まだ「やめなさい」だなんて

さすがはセフィリアさま。」

「それでこそ

犯しがいがあるというもの……」

「ああ……あーあああッー

絶対に……んんっーゆる……

くううッー……しま……せんッ

……あああッー」

「まあ時間がありますから

ゆっくりと楽しんでくださいよ」

「私は三番目ですな」

「はっ……すいませんね……」

それではこのまま

ゆっくりと……」

犯されている女の抗議など

まるで無視して

欲望を吐き出す順養の

確証をする男たち。

その余裕ぶりが

余計にセフィリアに

屈辱を与えた……

(ダメ……こんな……)

見知らぬ男性の……

モノなどで……私は……

「ああああああああ

あああああああああああッー





目を覚ましたリナリは上へ身裸にされていた
あわてて胸を隠そうとするが右手は背中に
そして左手は左足に縛りつけられ
身動きがとれない。

「……何？これは……？」

誰かが背後から寄ってきてそっと乳首を触る。

「やっ……誰？」

焦ったリナリは立ち上がって逃げようとするが
足を縛られた状態ではうまく立ち上がることができず
そのまま布団に倒れこもってしまった。



やうに、讀者の心を、いぢぢいぢ覺えても、僕は、ずつと、リナリ洋の二を見てたよ。

Handwritten text: 1000

合のたふし

二、探索者(2)

だったら何で二人

「もちろんひどいことは上

でも今日からはリナリーは僕のものだ

「何を……きく……やう……」



「だ…ダメ…そ
「ああ…やっど
リナリーの細
脚を撫で回
「ダメーおわ
私はあな
「フフ…な
をういう
シ
をわけてきた



興奮してきた男はショートパンツを、ムリやり引きちぎり、腰を引き寄せ、思うがままにリナリーの股間を弄ひ始めた。「あっ……あふう……やめろ……ああっ」「お尻の穴もキレイだね……想像したとおりだ……」「えっ……何……！ あっ……うゝああああっ！」「反応は想像以上だ……」敏感なんだねリナリー……「フッフ」「やゝーダメ……」抜いて……あああ……肛門パイプを入れられたままクリトリスを優しくなでたりつまんだり……リナリーの恥ずかしい地聲は、見知らぬ男の欲望に完全に占領されてしまった。



「ざあいよいよリナリーが
完全に僕のものになる瞬間だ……」
アナルにパイプを入れたまま
両足首をつかんで大きく開かせた。
「だ……ダメ……ダメ……ダメ……」
（うそっ……イヤッ……誰か助けて……）
「誰か……」
「ああああああっ……」



「ひとつになれてうれしいよリナリー…。リナリーも嬉しいだろ？」

「こ…こんな…ひどい…っ…ああっ！ ああっ！」

「フフフ…僕無しじゃいられない体にしてあげるよ」

「ああっ！ あっ！ んっ！ んんっ！ ああっ！」

「ああああああああああああああああああああっ！」





